

戦後内戦期中国における基層社会の変容に関する研究

プロジェクト代表者：笹川 裕史（教養学部・教授）

1 研究の目的

本プロジェクト研究は、「近現代中国の戦時動員と社会変容」という数年来の中長期的研究課題の一環である。近現代中国において社会を大きく変容させた戦争は、8年間という長期の総力戦となった日中戦争（1937年～1945年）と、その後4年間にわたって激戦を繰り広げた国共内戦（1946年～1949年）である。このうち、日中戦争期の分析は、すでに『銃後の中国社会——日中戦争下の総動員と農村——』（岩波書店、2007年）という著書にまとめており、同書は学術界だけではなく、一般の論壇誌や新聞紙上の書評欄でも取り上げられ、一定の評価を得ている。本プロジェクト研究の目的は、同書の基本的な視点と方法を継承して、中華人民共和国成立の前夜にあたる戦後内戦期を取り上げ、すでに研究が進展している同時期の政治や経済の変化ではなく、それらを根底において規定する社会秩序の変容を考察することにある。そこでは、日中戦争という総力戦の下で始まっていた基層社会の混乱や変容がより深刻な様相を呈しており、中国が革命という政治的激動に突き進む際の、社会の側の諸条件を把握することになる。

一般に、従来の研究においては、1949年革命の歴史的必然性を清末以降の社会的矛盾の蓄積にまで溯ってとらえる通念がなお根強いが、本研究プロジェクトでは日中戦争期から革命前夜にかけて行われた戦時動員とその矛盾こそが、人民共和国の成立やその諸政策を受容しやすい社会条件を形成したという見通しに立っている。このような観点は、従来の歴史像に対する斬新な問題提起になるというだけでなく、組織性の低さが指摘されている伝統中国社会と、緊密に組織された社会主義下の中国社会との落差を、歴史的かつ整合的に理解する枠組を提供することになる。

2 研究の方法

このような研究目的を達成するために、本プロジェクト研究では、主要史料となる地方新聞や稀覯雑誌のマイクロフィルム（すでに購入済み）をPDF化して、パソコンの画面上で簡便に閲覧・複写できるようにした。これによって、当時の社会秩序の様態を伝える多様な諸情報を効率的に整理・解読することができた。本プロジェクト研究費用の大半は、これに費やした。また、他の外部資金（科研費補助金）によって中国の上海市・成都市の歴史文書館を訪問し、現地に残されている当時の行政文書（未刊行）などの豊富な一次史料を調査・収集した。この両者の史料群を併せると膨大な量になるが、これらを緻密に解読・分析することが、本プロジェクト研究の基本となる作業である。

さらに、本プロジェクト研究の一環として、その分析の成果の一部を四川大学歴史文化学院（中国成都市）が主催する小規模な学術交流会で発表し、現地の歴史研究者たちとの有益な意見交換を行なった。これは、本プロジェクト研究の成果を海外の学界に向けて発信するための一つの試みで

あるが、他面で、意見交換を通じて、現地の研究者でなければ知り得ない貴重な研究情報を入手することができた。それらは、彼らとの人的関係を構築したこととともに、今後の研究の発展にも生かすことができよう。なお、この研究交流会の場で、四川大学歴史文化学院から埼玉大学図書館に十数冊の稀覯本を寄贈していただいたことも付記しておく。

3 研究の内容

研究成果としては、上記の史料群を駆使して、戦後内戦期の四川省の社会動態を生々しく描き出した研究論文を公表した（4. 研究成果の（1））。

そこでは、内戦の本格化に伴って再開された苛烈な戦時動員の実態とその弊害、それに抵抗する地方レベルの民意機関の動向、軍隊・都市への食糧供給の停滞とそれによる社会的パニック、貧富の格差のより一層の拡大、増殖する貧民・難民に対する救済策と一体となった管理強化、あからさまな自己保身に走る富裕層と彼らを敵視する世論の激化、戦時動員を担う末端行政の機能不全と空洞化、さらには国家の統制の及ばない暴力的な私的権力の蔓延などを具体的に論じている。

ここから、国民政府という1つの国家を存立させていた社会秩序が急激に崩れていく様相とともに、革命後の社会が否応なく背負わなければならない諸課題が次第に姿を現してくる動きを観察することができる。1949年革命が対峙した社会的現実とは、長期にわたって存続してきた中国の伝統社会などではなく、日中戦争から戦後内戦にいたる十数年間の苛酷な戦時下において急激に変容したものであった。そして、このことが、その後の中国共産党の政治理念や諸政策（階級闘争論、土地改革、社会主義化など）の実施を一面で容易にするとともに、他方でその政治文化に看過できない陰影を帯びさせることになった。中華人民共和国初期の特質は、その政治理念やイデオロギーを分析するだけでなく、以上のような歴史的経緯による規定性を十分に考慮に入れなければならないことが具体的に明らかになったといえよう。

なお、この論文の内容の一部は、上述したように、四川大学歴史文化学院が主催する学術交流会で発表した。その内容は、当日配布された報告集（4. 研究成果の（2））に収められているが、後日、改めて学術論文集として中国で正式に出版される予定である。

4. 研究の成果

（1）笹川裕史「銃後社会の終焉とその遺産——1949年革命前夜四川省の社会動態——」、『現代中国研究』、第23号、2008年10月、3～19頁。

（2）笹川裕史「1949年建国前夕四川省の戦時徴発及社会変化」（中国語）、四川大学歴史文化学院主催『近代中国与日本』学術研究会、2008年9月28日、四川大学（成都市）。